

ひぐらしのなく頃に～  
日記に記された世界～  
ファースト

橋口トルティエヤ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは雛見沢しかしこの世界に知らない者たちが来た……

それは何を示しているのかそして、世界はどう変わって行くのか……

# 目次

雪輝たちは違う世界に行き新しい生活が始まったしかしその世界は何年にもわたって何か起きていた。雪輝たちはこの世界でも生き延びれるのだろうか

1

雪輝たちは新しい世界でそこで起きている事件について知る

7

雛見沢に予期せぬ訪問者

12



雪輝たちは違う世界に行き新しい生活が始まったしかしその世界は何年にもわたって何か起きていた。雪輝たちはこの世界でも生き延びれるのだろうか

「… ッキー… ッキー、 ッキー！」

「んんん何かあったの？ 由乃」

あつ！ やつと起きた

「由乃そんなに慌てて何かあったの？」

ッキーはまだ周りを見てないようだ

ッキーがしつかりし始めてから自分たちの状況を教えた

自分たちはどこかの学校の裏にいたことを

「ここ由乃は、どこかわかる？」

「わからない… ごめんね ッキーの役にたてなくて」

「いいんだよ僕もわからないし」

2 雪輝たちは違う世界に行き新しい生活が始まったしかしその世界は何年にもわたって起きていた。雪輝たちはこの世界でも生き延びれるのだろうか

ユツキーはやっぱりやさしいな

「ここにもなにもわからないからまず誰か人に聞いてみよう」

えっ… まだユツキーと一緒にいたかったのに…

「… そんな顔すんなよ由乃」

「えっ、ごめん」

ユツキーにこんな顔見られた恥ずかしい

そして裏から出る小さいグラウンドに出た

「やっぱりここは学校っぽいね」

「けど結構田舎だねこの学校結構小さいし」

そういつ周りを見回していると後ろから急に声をかけられた

「ねえその君たち」

振り返ってみると緑の長髪を結んでいる女の子がいた

「君たちが新しく難見沢分校に転校してきた我妻由乃ちゃんと天野雪輝君だね？」

転校してきた？

「転校してき、ふぐっ…」

なにすのユツキー

「ここは話を合わしといたほうがいいと思う」

「うん、わかった」

緑の髪の女の子の話の話を聞くとここは昭和58年の6月でここは雛見沢分校という学校らしい

けどそれよりもこの女の子ユツキーに馴れ馴れしいな……

「まあ立ち話はこれくらいにして学校に入って」

「あつはい、わかりました」

緑の髪の女の子についていき学校に入って行つた

そして教室のドアの前に止まると振り返り笑いながら言つた

「このクラスは曲者ばかりだから気を付けてね」

そう言つて緑の髪の女の子はドアの上を見ていた。その目線の方角を見ると黒板消しがドアに挟まっていた

「じゃあどうぞ先に入って」

先に入つて……

「大丈夫？ ユツキー」

「こんくらいどうつてことないよ」

そう言つてドアを開けて黒板消しが落ちたのを見てユツキーは入って行つた

しかし、足に紐が引つ掛かつた

4 雪輝たちは違う世界に行き新しい生活が始まったしかしその世界は何年にもわたって起きていた。雪輝たちはこの世界でも生き延びれるのだろうか

しまった！あれはダミーか

倒れそうになったがギリギリ持ちこたえて踏ん張り倒れなかった

そして下を見るとちやうど倒れたとき顔が来るところに墨汁が置いてあった

これ・・・子どもがやることか!?

「転校生さん初日から遅刻ですわ」

多分これをやったのはこの黄色い髪の子だろう

「大丈夫？ユツキー？」

「ああ、大丈夫だ」

くそ、こいつらユツキーをバカにしやがって

そいつらの方向に向かおうとしたとき

雪輝が手を掴んだ

「由乃、あまり目立つようなことはしないようにしよう」

そう言いつつ雪輝は立ち上がった

すると先生が中に入ってきて

黄色い髪の子がこっぴどく怒られていた……………ザマアーミロ

「それでわ転校生君、自己紹介してあと特技も」

「あっはい、名前は天野雪輝自分が他の人よりもうまいと思うのはダーツなどの投てき



です」

まあ初めはこんなものだろう

「じゃあ次はあなた」

「はい、名前は我妻由乃、えーと特技は人の観察です」

うん、これは多分僕に当てはまるな

「じゃあ席は後ろの2つに座ってください」

促されて席に座ったがこの学校は1つしかクラスがないため年がバラバラだ

「じゃあ今からは少しだけ転校生の由乃さんと雪輝君と話す時間をとります」

するとクラスの年長組が集まってきた

「じゃあまず委員長からだね私の名前は園崎魅音まあこれからわからないことがあったら何でも聞いて」

「じゃあ次は俺だな、名前は前原圭一俺も転校してこつちに来たまあ最初はなれないと思うけどここでは楽しいことばかりだから頑張れ」

「次は私だね名前は竜宮レナ気軽にレナって呼んでね」

転校してきたばかりなのに気軽に話してくるなんてやっぱり田舎だな

そう思っているときさっきの女の子と紫の髪の女の子が近づいてきた

「わたくしたちも自己紹介しないといけませんね、わたくしは北条沙都子と言います

6 雪輝たちは違う世界に行き新しい生活が始まったしかしその世界は何年にもわたって起きていた。雪輝たちはこの世界でも生き延びれるのだろうか

わそして、この子は古手梨花ですわ

「よろしくなのです」

そしてクラス全員に自己紹介されたが全て覚えることはできなかつた

「まあこれからこの雛見沢でいろいろあると思うけど楽しんでいってね」

そして私たちの新しい世界の生活が始まった

雪輝たちは新しい世界でそこで起きている事件について知る

僕は今、危機的状況にある……

それはもうくつがえせない、由乃… 僕を、助けて………

「雪輝君はこれで3連敗だね〜!」

「そんなこと言っちゃいけないよお、魅ちゃんまだ初めてなんだから」

僕たちは今、じじ抜きをしている

しかし、相手はカードの傷でそれが何か分かるらしい…… こんなの、勝てるわけない

!!

「しっかし、雪輝とは違って由乃はすごいなあ、まだ初めてなのに勝負師の勘つてやつかな、どんだんペアを揃えていつて、まるで歴戦を乗り越えてきた戦士みたいだぜ」

まあ由乃はそれそのものなんだけどね

けど部活は普通こういうものではない。

この雛見沢分校には部活がこれしかないらしい

さらに部員は魅音さんたち5人だけで活動はゲームやアクティビティをすることく

らいである

しかし、なんで僕たちは強制的に部活に入らされたんだろう…:

しかし、情報を集めるにはいい機会だ

「そういえば魅音さん」

「ん、なんだい雪輝君？」

「雛見沢って何かあるんですか」

そう言うと全員の表情が固まった

なんか聞いてはいけないことを聞いてしまったか、

「雛見沢では毎年6月に綿流しっていう雛見沢だけである祭りがあるんだよ！」

「へえーそんなのがあるんですか」

良かったあ変なことを聞いてなくて

しかし、由乃が首を突っ込んできた

「その綿流しっていうのは何かあるんですか？」

.....

なんでこんなに静かになるんだ

由乃はまた変なことを言ったからか？

すると魅音が口を開いた

「まあそんなことはどうでもいいから！ねっねっ！ハイ今日は解散！」  
「ちよつと待って！絶対に何かあるんでしょ？」

そうやって呼びかけようとすると、レナが入り込んできた  
ビクッ!!!

由乃がいきなり後ろに跳躍して戦闘体勢にはいった

「どうしたんだ？由乃」

「ユツキーあいつは気をつけてあいつは本当にヤバイ！」

そしてレナが表情を変えて笑いながら帰っていった

「どうする由乃これから？」

「私は今からあのレナっていうやつが言っていたゴミ山に行ってみる……  
あいつ！  
よく行ってるらしいからそこであいつの正体を暴く！」

由乃がいつになつて本気だなあけど今回の由乃はいつも以上に怖い

「あつ、ゴメンユツキー私そんな怖い顔してた？」

「ううん大丈夫早くその場所に行こう」

そう言いつつ僕たちは学校を出た

結構な距離を歩いてゴミ山に着いた

正直に言うと本当にゴミ山だなあ……

「ユツキーゴミなんか見てないで情報を集めない」と

そう言うのと由乃はなれたようにゴミの上をかけていく、やっぱり由乃はスゴい  
僕はあまり動くの嫌いだからそこで休憩しよう……

目をどじようとしたがいきなり光った

パシッ!

「なんだ?!」

起き上がって後ろを見るとタンクトップの変なやつがいた

「うわっ!ビックリしたあ」

へッ?

「ゴメンゴメン、驚かすつもりはなかったんだあ、君は転校生かい?」

はいっ?

「あつまず自己紹介をしないとね、僕は富竹フリーのカメラマン、メインは野鳥の撮影だ  
よ」

「いや、なんも聞いてないし、」

まあいい

「すいません、富竹さんでしたよね難見沢について何か知らないですか?」

「僕はあんまりずつといるわけではないけどここで起きている事件についてなら知って

いるよ」

事件？

「毎年6月の綿流しの季節に1人死んで1人いなくなる、まあ偶然だと思っただけじゃあまたね転校生君、」

くそ聞かなければ良かった

余計ややこしい

これから

由乃とどうしよう

そして雪輝は考えるのをやめた……

## 雛見沢に予期せぬ訪問者

雪輝たちは未知の世界にいる

そして、そこでは毎年事件が起きている

雪輝はこの世界でどのようなことが起きるのかわからない……………

「おはよう、魅音さん、レナ、圭一」

「オハヨー、雪輝君」

「はう、おはよう雪輝君、由乃ちゃん」

「おう！おはよう雪輝！」

今日も僕たちはいつも通り挨拶を交わした

しかし、そこにはいつものメンバーではなかった

「梨花ちゃんと沙都子ちゃんは？」

聞いてると、皆もまだ来てないことを不思議がつている

すると扉を開いた音が聞こえた

しかし、そこにいたのは梨花ちゃんだけで沙都子ちゃんはいなかった



梨花ちゃんに聞いても知らないと言うばかりだった

そして先生が来て沙都子ちゃんが来ていない理由を聞かされた

「沙都子ちゃんは……今日は熱で休みです」

「なんで梨花ちゃんは知らないのに先生は知っているんですか？」

そう圭一が聞いた

先生は言うのを少しためらった

そして口が開いた

「沙都子さんは……熱と言う報告を沙都子さんの叔父から聞きました」

そう言うのと僕と圭一と由乃以外顔が青ざめた

「ユツキー、なんか先生おかしなこと言ったの？」

「いや、別に普通のことを言ったような気がする」

そうココソコソと話していたら圭一が切り出した

「魅音、沙都子と沙都子の叔父は何かあったのか？」

「……………」

魅音は口を閉じていた

するとレナが話し出した

「沙都子ちゃんは叔父さんに虐待を受けていたの……」

「

「はあ!? そんなことあったのか? じゃあ、またやられるじゃねーか!」

そう言つて圭一が頭に血を上らして今にも突つかかりそうなので先生が止めた

「沙都子さんについては私も検討してみます。なので今は落ち着いていてください」

そして僕たち全員はもやもやな気持ちが残ったまま授業を始めた

やはりさっきの空気を引きずったまま授業が終了した

そしてお昼の時間になるといつものように机をくつつけて弁当を食べ始めた

いつもなら楽しい会話だが、一人だけいないだけでこんなにも変わるかと思つたそして弁当を食べると沙都子ちゃんの話に入った

「魅音、沙都子について知つてる情報は他にも何かないか?」

「わかつた、もうこんな機会もないと思うし……沙都子にはね悟史つて言う兄がいたんだよ、けど悟史は沙都子に何も告げずにごどこかへ行つたんだよ」

あんな沙都子ちゃんは元気だったのに過去にそんなことあったのか……

そんなことを思つてみると、大きな音をたてて扉を開ける音がした

その方を見るとよく見る顔があつた

「詩音!」

そう魅音が叫んだ

呆然としていたが魅音に聞いた

「詩音って誰？、それに魅音さんと顔そっくりだよね」

そう言うのとレナがこつちを振り返って言った

「詩いちゃんわね、魅いちゃんの双子の妹なの」

へえー、魅音さんって双子だったんだ

そう思っていたら急に由乃が裾を引つ張つてきた

「なんだよ、由乃？」

そう小さい声で聞くと

由乃はアイツとはい関わらない方がいいと警告してきた

いつも思うけどなんで由乃はこんなにも用心深いんだろう

「お姉、鉄平が帰ってきたってほんとですか」

「そ……そう、だけど」

「で、お姉たちは今なにしてるんですか？」

そう聞くと魅音さんは困った顔で言い返した

「今、沙都子をどうするか話し合おうと思つて」

そう言うのと詩音さんの大きな声が教室に響き渡つた

「はい!!今から?遅すぎるんですよ!こうやって始めようとしてる間にも沙都子は虐待を受けているかもしれないですよ!!」

そのとおりの意見で皆も言い返せなかった  
皆が黙っていると、詩音さんが口を開いた

「沙都子を救う方法なんて簡単じゃないですか」

皆がキョトンとした顔で見つめると、詩音さんは驚愕のことを言い放った

「北条鉄平をこの世から消し去ればいいんですよ」

その瞬間教室が凍りついた